様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：２４４０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３８０８４６

研究課題名（和文）都市生活環境尺度による都市度の定量化に関する心理学的研究

研究課題名（英文）A psychological study on measurement of the degree of urbanization by Urbanization of Living Environment Scale

研究代表者
佐伯　大輔（Saeki, Daisuke）

大阪市立大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：６０４６４５９１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、居住環境の都市度を測定する「都市生活環境尺度」と都市的生活環境をどの程度重視するかを測定する「都市生活環境価値尺度」を作成し、これらの尺度得点と自尊感情や主観的幸福感などの心理学的変数との関係を調べた。その結果、「都市生活環境尺度」は５因子、「都市生活環境価値尺度」は４因子からなること、各下位因子と心理学的変数との関係は必ずしも同方向ではないことが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：The present study developed two psychological scales, one of which measures the degree of urbanization of participants’ living environment (Urbanization of Living Environment Scale; ULES), and the other measures the degree of importance that participants attach to the urban living environment (Value of Urban Living Environment Scale; VULES), and also examined the relationship between these scales and other psychological variables such as self-esteem and subjective well-being. Results of factor analyses showed that ULES has five subscales and VULES has four subscales. And it was found that the relationships between these subscales and psychological variables are not necessarily in the same directions.

研究分野：行動分析学

キーワード：集合現象　都市化　主観的幸福　価値判断　自尊感情　刺激欲求　親和動機　都市度

１．研究開始当初の背景

都市の生活環境が居住者に与える影響は、有益なものから有害なものまで様々ある。都市部と非都市部の間で人の行動パターンや心理学的特徴の比較を行っている先行研究（石黒，2010; Lederbogen et al., 2011; 松木，1997; 松本，2005; 立山，2010; Wang, 2004）では、都市とそれ以外の地域を人口規模に基づいて分類し、地域間で、生活様態、行動パターン、心理学的特徴を比較するにとどまっており、各居住者の生活環境がどの程度「都市的」であるかを定量的に測定していない。

２．研究の目的

本研究では、個々の居住者にとって、生活環境がどの程度都市的であるかを測定できる「都市生活環境尺度」を開発する。次に、自尊感情や主観的幸福感といった、居住地域の都市化の程度と関係すると思われる心理学的変数と、この尺度との関係を明らかにすることにより、都市生活者の心理学的特徴と彼らが直面する心理学的問題を明らかにする。さらに、都市的な生活環境が居住者にとってどの程度望ましいと感じられるかを測定する「都市生活環境価値尺度」を開発し、都市的な生活環境が居住者にもたらす心理的利益と不利益について明らかにする。

３．研究の方法

予備調査：「都市生活環境尺度」作成のための予備調査として、41 名の大学生を対象に、「都市的」または「都市的ではない」と思われる状況について自由記述により回答を求め、その結果に基づいて、予備尺度の 40 項目を確定した。

研究１：予備尺度に基づいて本尺度の作成を行った。予備尺度を用いた調査を、大学生 215 名を対象に実施し、質問項目で示された内容（例えば、「静かである」）が、回答者の住んでいる周囲の環境にどのくらい当てはまるかを、「まったくあてはまらない」から「非常にあてはまる」の９件法で回答させた。回答について、因子分析法により尺度構成を行った。項目の取捨選択を行い、信頼性の高い結果が得られた時点で「都市生活環境尺度」の本尺度とした。尺度の因子数を確認し、質問項目の内容に基づいて因子名を決定した。また、「都市生活環境尺度」と関係すると思われる「自尊感情尺度」（山本他，1982）、「主観的幸福感尺度」（大石，2009）、「関係流動性尺度」（Yuki et al., 2007）についても同じ大学生を対象に測定した。

研究２：インターネットを利用した調査方法により、日本全国の成人男女 1,000 名（20 歳～69 歳）を対象に、再度、都市生活環境尺度の構成を行い、この尺度と心理尺度（自尊感情、主観的幸福感、関係流動性）との関係を調べた。

研究３：研究２と同様の方法により、経済状態、年収、学歴、階層帰属意識に関するフェイス項目を加え、さらに「都市生活環境尺度」にも、物価や雇用機会に関する項目を付加して調査を実施した。

研究４：研究２と同様の方法により、「都市生活環境尺度」の項目を用いて、都市的生活環境が回答者にとってどの程度望ましいと判断されるかを測定する「都市生活環境価値尺度」の作成を行った。これは例えば、居住環境について「オフィス街が近い」ことは、「都市生活環境尺度」では「都市的」と判断されるが、都市生活環境価値尺度では、「オフィス街が近い」こと（居住環境が都市的であること）が、回答者にとってどの程度好ましいと判断されるかを測定した。調査では、質問項目で示された内容について、「自分が住む周囲の環境としてどの程度望ましいか」を、「まったく望ましくない」から「非常に望ましい」の９件法で回答させた。さらに、これらの測定内容と関係すると思われる、「自尊感情尺度」、「刺激欲求尺度・抽象表現項目版」（古澤，1989）、「親和動機尺度」（杉浦，2000）、「主観的幸福感尺度」の測定を同時に行うことにより、都市的生活環境を好む程度が、どのような個人変数によって影響を受けるのかを調べた。

研究５：同一の回答者に対して「都市生活環境尺度」と「都市生活環境価値尺度」を用いて測定を行うことにより、「居住環境の都市度」と「都市的生活環境を望ましいと思う程度」との関係を明らかにした。さらに、「自尊感情尺度」、「刺激欲求尺度」、「親和動機尺度」、「主観的幸福感尺度」の測定も同時に行うことにより、居住環境の都市度や都市的生活環境を好む程度が、どのような個人変数によって影響を受けるのかを調べた。

４．研究成果

研究１：生活環境の都市度を構成する因子として、「交通の利便性」、「施設の充実」、「生活の快適さ」、「自然の乏しさ」、「活気」、「刺激の量」、「通信インフラの整備」、「買い物の利便性」の８因子が抽出された。「買い物の利便性」を除く因子は、人口密度と有意な正の相関関係を示したことから、都市生活環境尺度の得点は、都市部ほど高くなりやすいことを示すと同時に、人口密度とは異なる側面をとらえていることも示唆される。さらに、都市度と心理尺度との関係を明らかにするために、都市生活環境尺度の下位因子を独立変数、自尊感情、主観的幸福感、関係流動性を従属変数とした重回帰分析を行った。その結果、「買い物の利便性」が自尊感情に正の影響を、「交通の利便性」と「活気の高さ」が主観的幸福感に正の影響を、「自然の乏しさ」が主観的幸福感に負の影響を与えることが明らかになったが、関係流動性とは有意な関係がみられなかった。

研究２：因子分析の結果、「施設の充実」、「生活の利便性」、「生活の不快さ」、「自然の

乏しさ」、「交通の利便性」の５因子が抽出された。これらの因子は、それぞれ人口密度と有意な相関関係を示したことから、都市度の指標として妥当と考えられた。さらに、都市度と心理尺度との関係を明らかにするために重回帰分析を行った結果、「施設の充実」は関係流動性と自尊感情に正の影響を、「生活の利便性」は関係流動性と自尊感情と主観的幸福感に正の影響を、「交通の利便性」は関係流動性に正の影響を、「生活の不快さ」は自尊感情に負の影響を与えることが明らかになった。

研究３：「都市生活環境尺度」については、調査２と同様の因子と「雇用機会の豊富さ」の因子が新たに抽出された。重回帰分析の結果、「施設の充実」と「移動の容易さ」は自尊感情、主観的幸福感、関係流動性に正の影響を、「生活の利便性」は自尊感情と関係流動性に正の影響を、「生活の不快さ」は自尊感情、主観的幸福感、関係流動性に負の影響を、「雇用機会の豊富さ」は主観的幸福感と関係流動性に正の影響を与えることが明らかになった。これらの結果は、都市的生活環境が、居住者の自尊感情や主観的幸福感を高める側面と低める側面の二面性を有していることを示している。また、関係流動性は、居住環境の都市度が高いほど高くなることが考えられたが、「生活の不快さ」が負の影響を与えていることから、必ずしも都市度が一方向の効果をもたらすわけではないことが明らかになった。

研究４：「都市生活環境価値尺度」について、因子分析の結果、「施設の充実と流行へのアクセス」、「生活の便利さ」、「自然の豊かさ」、「交通の利便性」、「娯楽の少なさ」の５因子構造であることを示す結果が得られた。回答者の居住地域の人口密度に基づいて、「都市群」と「村落群」に分け、各因子の尺度得点の群間比較を行った。その結果、「施設の充実」、「生活の便利さ」、「交通の利便性」は都市群の方が、「自然の豊かさ」は村落群の方が有意に得点の高いことが分かった。この結果は、人は自分が住む環境の特徴に高い価値を置くことを示している。また、刺激欲求の下位尺度である「新奇な経験志向」と「抑制からの解放」は、「施設の充実と流行へのアクセス」という刺激の多さと関連する生活環境の価値を高めていたが、「スリルと冒険志向」は、都市的な生活環境の価値を低める傾向があった。自尊感情は、利便性の高い生活環境の価値を高めていた。親和動機の下位尺度である「拒否不安」は、「生活の便利さ」の価値を高める一方で、「自然の豊かさ」の価値も高めていた。

研究５：因子分析の結果、「都市生活環境尺度」は５因子構造（表１）であり、「都市生活環境価値尺度」は４因子構造（表２）であることを示す結果が得られた。これら２つの尺度の間の関係として、「居住環境における施設の充実度が高い人ほど、交通の利便性に高い価値をおく」といった、生活環境の都市度が高いほど、都市的生活環境の価値を高く判断する傾向が見られたが、一方で、利便性の高い、都市的な生活をしている人ほど、都市生活の不快さを高く判断する傾向も見られた。

表１．都市生活環境尺度の因子負荷量表（研究５）

	因子 1	2	3	4	5
第1因子：施設の充実 (α=.89)					
6. 大型のショッピングセンターが近くにある	.60				
9. オフィス街が近い	.74				
11. 人々の服装がおしゃれである	.65				
14. ビルが多い	.74				
17. カフェがたくさんある	.79				
22. 流行しているものを知ることができる	.56				
28. 様々なチェーン店がある	.73				
31. コンサートが開催される施設が近くにある	.61				
38. 繁華街が近くにない	-.49				
39. 商業施設が近い	.73				
40. 美術館や博物館が近くにある	.56				
第2因子：生活上の便利さ (α=.79)					
4. 教育機関が近くにない		.63			
24. インターネットがつながりにくい		.49			
26. 近くに住宅が少ない		.63			
27. 病院が少ない		.68			
33. 道路が舗装されていない		.61			
35. コンビニエンスストアが近くにない		.68			
第3因子：生活上の不快さ (α=.69)					
5. 交通量が多い			.72		
13. 昼間は人が多い			.78		
16. 近所付き合いが少ない			.30		
21. 空気が汚い			.57		
第4因子：自然の乏しさ (α=.75)					
8. 自然がある				.67	
36. 田んぼや畑が多い				.91	
第5因子：交通の利便性 (α=.84)					
12. 最寄り駅の電車の本数が多い					.85
15. 交通の便が良い					.85
18. 地下鉄が近くにある					.66
25. 駅が近くにある					.67

因子間相関	1	2	3	4	5
1	—				
2	-.35	—			
3	.84	-.41	—		
4	-.53	.62	-.64	—	
5	.83	-.50	.82	-.65	—

表２．都市生活環境価値尺度の因子負荷量表（研究５）

	因子 1	2	3	4
第1因子：施設の充実 (α=.86)				
6. 大型のショッピングセンターが近くにある	.74			
9. オフィス街が近い	.55			
11. 人々の服装がおしゃれである	.57			
14. ビルが多い	.33			
17. カフェがたくさんある	.61			
22. 流行しているものを知ることができる	.63			
28. 様々なチェーン店がある	.71			
31. コンサートが開催される施設が近くにある	.56			
39. 商業施設が近い	.75			
40. 美術館や博物館が近くにある	.58			
第2因子：生活上の便利さ (α=.80)				
4. 教育機関が近くにない		.56		
24. インターネットがつながりにくい		.73		
26. 近くに住宅が少ない		.45		
27. 病院が少ない		.74		
33. 道路が舗装されていない		.70		
35. コンビニエンスストアが近くにない		.61		
第3因子：生活上の不快さ (α=.48)				
5. 交通量が多い			.36	
21. 空気が汚い			.88	
第4因子：交通の利便性 (α=.86)				
12. 最寄り駅の電車の本数が多い				.80
15. 交通の便が良い				.82
18. 地下鉄が近くにある				.70
25. 駅が近くにある				.82

因子間相関	1	2	3	4
1	—			
2	-.39	—		
3	-.26	.84	—	
4	.82	-.60	-.51	—

個人変数との関係では、他者への親和動機は、生活環境の都市度を高めるが、他者からの拒否不安はこれを低めること、新奇な経験への志向と他者からの拒否不安は、都市的生活環境の価値を高めることが明らかになった。さらに、居住環境の都市度の高いことは

主観的幸福感を高めるが、都市的生活環境の価値の高いことは、主観的幸福感には影響しないことも明らかになった。

本研究の結果を統一的に解釈することは容易ではないが、都市生活環境尺度が５因子からなるという事実は、居住環境の都市度の指標として、人口密度データのみを用いることは不十分であることを示している。都市生活環境尺度と、自尊感情や主観的幸福感等の心理学的特徴の間には、下位尺度によって関係の異なるケースが見られた。この事実は、都市度と心理学的変数の関係を調べる場合には、都市度を構成するどの下位因子との関係を調べるのかを特定する必要のあることを示している。

本研究では、居住環境の都市度が、居住環境の主観的価値とどのように関係するのかを明らかにするために、都市生活環境価値尺度を作成した。この尺度の構成が都市生活環境尺度と類似していたという事実は、人々が都市度の各側面と対応するように価値判断を行っていることを示している。２つの尺度の間の関係から、都市的環境に居住している人が必ずしもその環境に高い価値を置いていないことが明らかになった。この事実は、人は必ずしも居住環境に満足を感じていないことを示しており、このことが心理的葛藤の原因となる可能性がある。都市度や都市的生活環境対する価値と心理学的変数との関係も複雑であり、これらの間に葛藤的な状況の存在することがわかった。

本研究では、自尊感情や主観的幸福感といった少数の心理学的変数しか取り上げなかったが、今後は、どのような心理学的変数が居住環境の都市度や居住環境に対する価値と相互作用しながら、居住者の精神的健康に影響するのかを明らかにすることが期待される。

＜引用文献＞

古澤照幸、刺激欲求尺度・抽象表現項目版（Sensation Seeking Scale-Abstract Expression）作成の試み、心理学研究、60 巻、1989、180－184

石黒格、都市度による親族・友人関係の変化：全国ネットワーク調査を用いたインティメイト・ネットワークの分析、人文社会論叢・社会科学篇、23 巻、2010、29－48

Lederborgen, F. et al.、City living and urban upbringing affect neural social stress processing in humans、Nature、474 巻、2011、498－501

松木隆、クロスセクションデータを用いた都市化の実証分析、大阪府立大學經濟研究、42 巻、1997、119－133

松本康、都市度と友人関係―大都市における社会的ネットワークの構造化―、社会学評論、56 巻、2005、147－164

大石繁宏、幸せを科学する－心理学からわかったこと－、2009、新曜社

杉浦　健、2 つの親和動機と対人的疎外感との関係－その発達的変化－、教育心理学研究、48 巻、352-360

立山徳子、都市度別にみた世帯内ネットワークと子育て：都心・郊外・村落間の比較検討、家族社会学研究、22 巻、2010、77－88

Wang, J. L.、Rural-urban differences in the prevalence of major depression and associated impairment、Social Psychiatry and Psychiatric Epidemiology、39 巻、19－25

山本真理子・松井豊・山成由紀子、認知された自己の諸側面、教育心理学研究、30 巻、1982、64-68

Yuki, M., et al.、Development of a scale to measure perceptions of relational mobility in society、Working paper series、Center for Experimental Research in Social Sciences、75 巻、2007

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 0 件）

〔学会発表〕（計 4 件）

① 佐伯大輔・宮崎弦太・矢田尚也・池上知子、「都市生活環境価値尺度の開発」、日本心理学会第 79 回大会、2015 年 9 月 23 日、名古屋国際会議場（愛知県名古屋市熱田区熱田西町 1-1）

② 佐伯大輔・宮崎弦太・矢田尚也・池上知子、「都市生活環境尺度の開発：都市－村落間の比較研究より」、日本心理学会第 78 回大会、2014 年 9 月 11 日、同志社大学今出川キャンパス（京都府京都市上京区今出川通烏丸東入）

③ 宮崎弦太・矢田尚也・池上知子・佐伯大輔、「関係流動性と上方比較経験が親密関係での交換不安に及ぼす影響―特性自尊心による差異の検討―」、日本社会心理学会第 55 回大会、2014 年 7 月 26 日、北海道大学札幌キャンパス（北海道札幌市北区北 8 条西 5 丁目）

④ 矢田尚也・宮崎弦太・佐伯大輔・池上知子、「都市生活環境尺度開発の試み」、関西心理学会第 125 回大会、2013 年 11 月 3 日、和歌山大学（和歌山県和歌山市栄谷 930）

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
佐伯　大輔（SAEKI Daisuke）
　大阪市立大学・大学院文学研究科・准教授
　研究者番号：　６０４６４５９１

(2)研究分担者
宮崎　弦太（MIYAZAKI Genta）
　東京女子大学・現代教養学部・講師
　研究者番号：　８０６３６１７６

池上　知子（IKEGAMI Tomoko）
　大阪市立大学・大学院文学研究科・教授
　研究者番号：　９０１９１８６６

(3)連携研究者

(4)研究協力者
矢田　尚也（YADA Naoya）